



皇朝二十四孝

079
1142



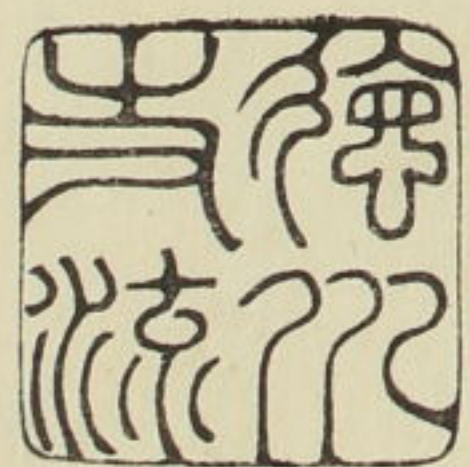
からむいふをむね
あはれさ母を僕らむ
あふ子をかき書い
我のこらむるを
ちかひをむらむる

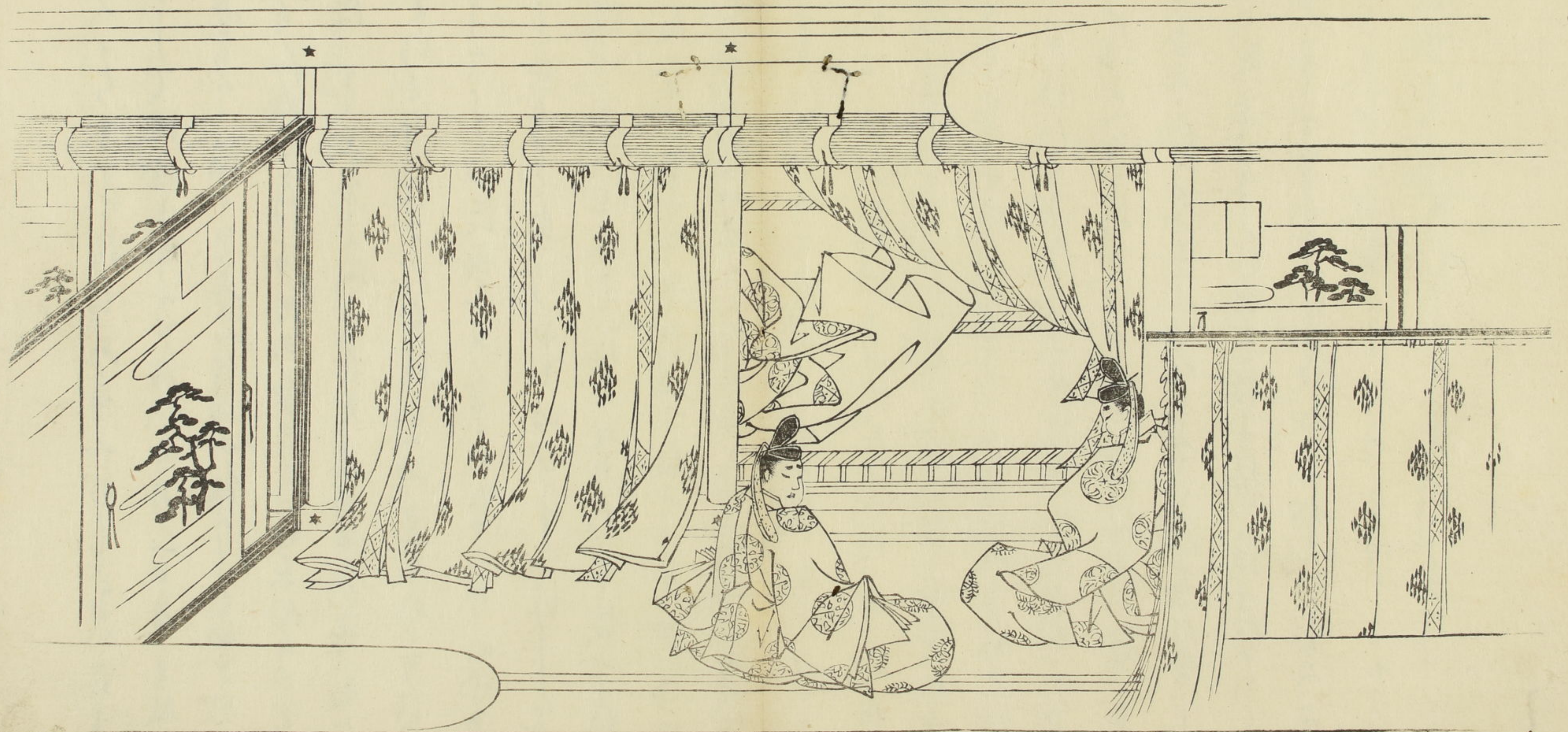
おし
あふ
彼を
あふ
海を

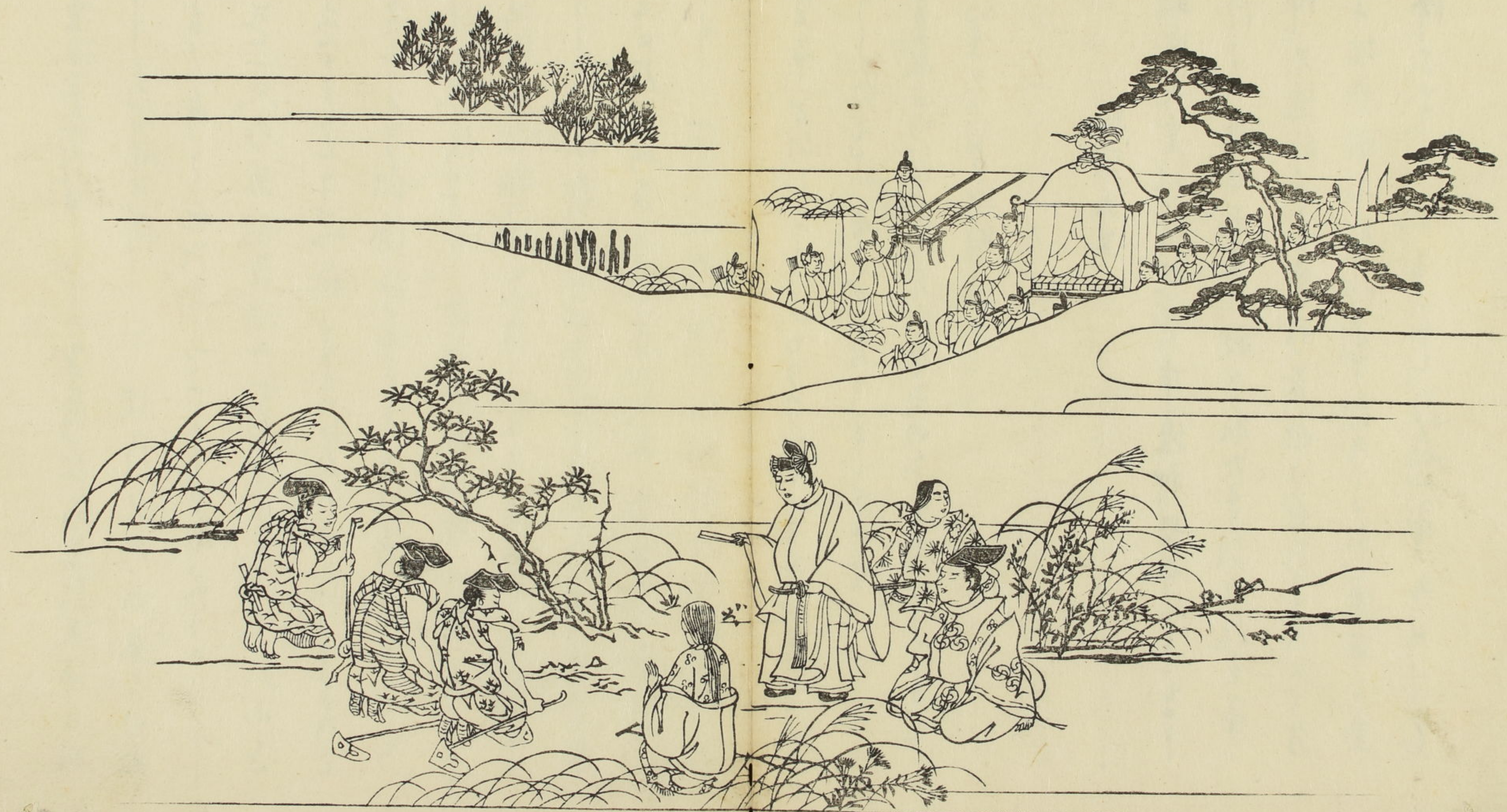
の事なまかえらばるる家
國人の事なまかえらばるる家
の事なまかえらばるる家
の事なまかえらばるる家
の事なまかえらばるる家

安政三年初秋

源容保謹識





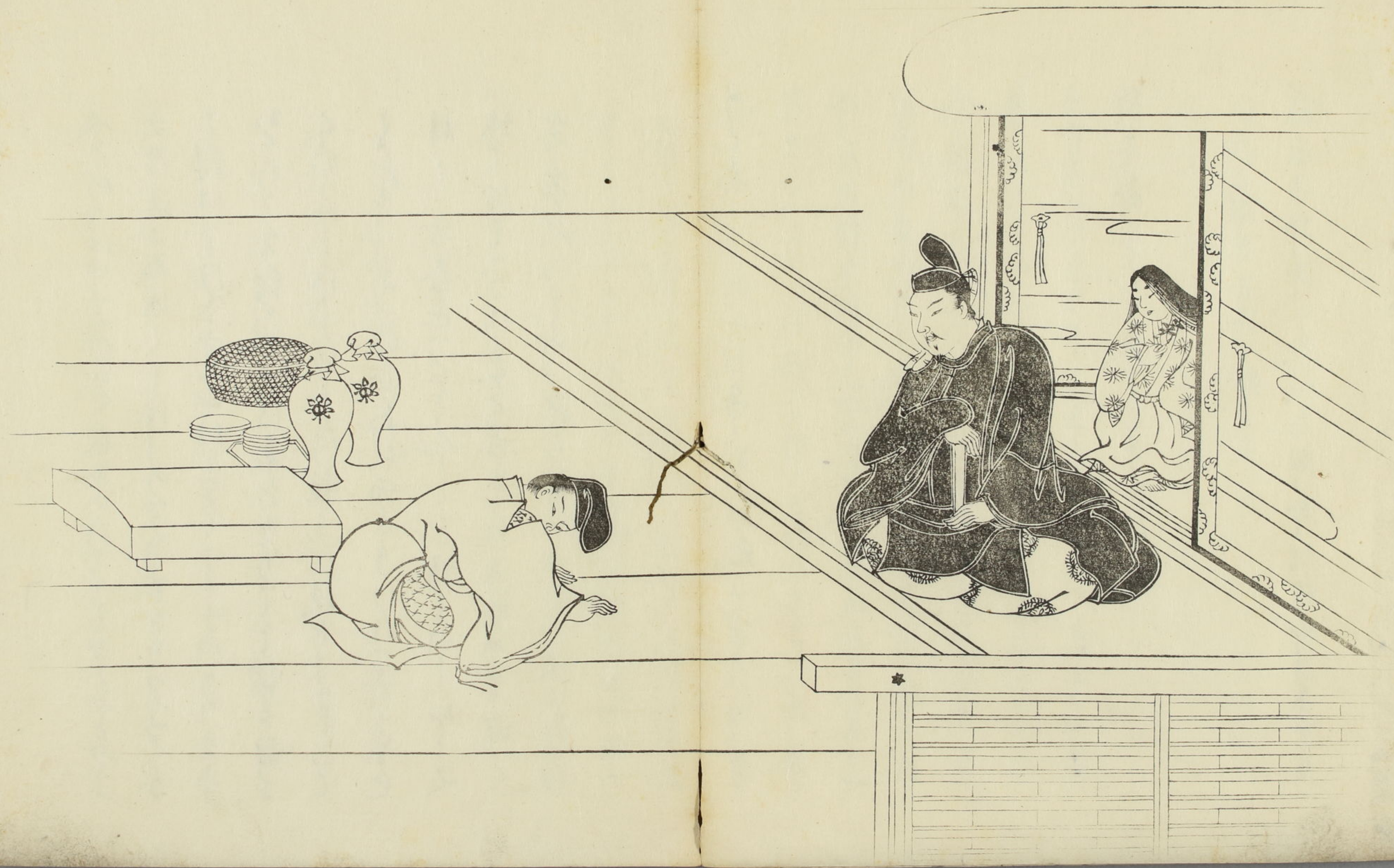




冷泉院よりを給ふ親王以下仲酒宴ありて
各福をうけたまひしと帝はほろろありて
んとせしむる可南階れりてく菊伝正一
して跪き給ひた大長源常公右大臣良房公を
召し給へ給へて大后乃おほを給へりわれ
常公治をれ中よりと居れりて帝は車
よ乘給へ給へて御座りてりてりてりてり
とせよとの給へは朕しあはれりてりてり
給へ給へりてりてりてりてりてりてり
奏とせりてりてりてりてりてりてり
みし給へりてりてりてりてりてり
めと奏し給へは帝則法殿よ登り御座
りてりてりてりてりてりてりてり
御座りてりてりてりてりてりてり
給へ給へりてりてりてりてりてり
今涙をりてりてりてりてりてり
りてりてりてりてりてりてりてり
りてりてりてりてりてりてりてり
給へ給へりてりてりてりてりてり
給へ給へりてりてりてりてりてり

藤原吉野卿

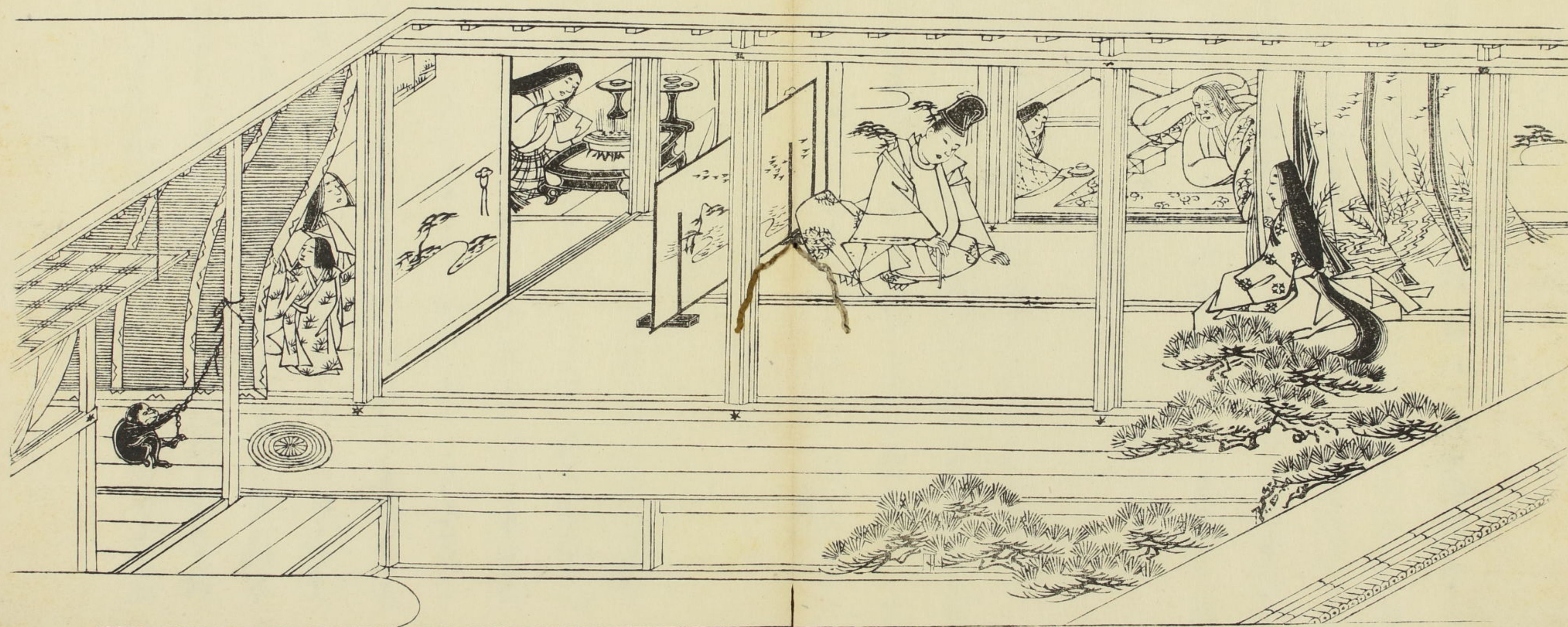
藤原吉野卿ハ参議兵部卿細繼卿乃子なり

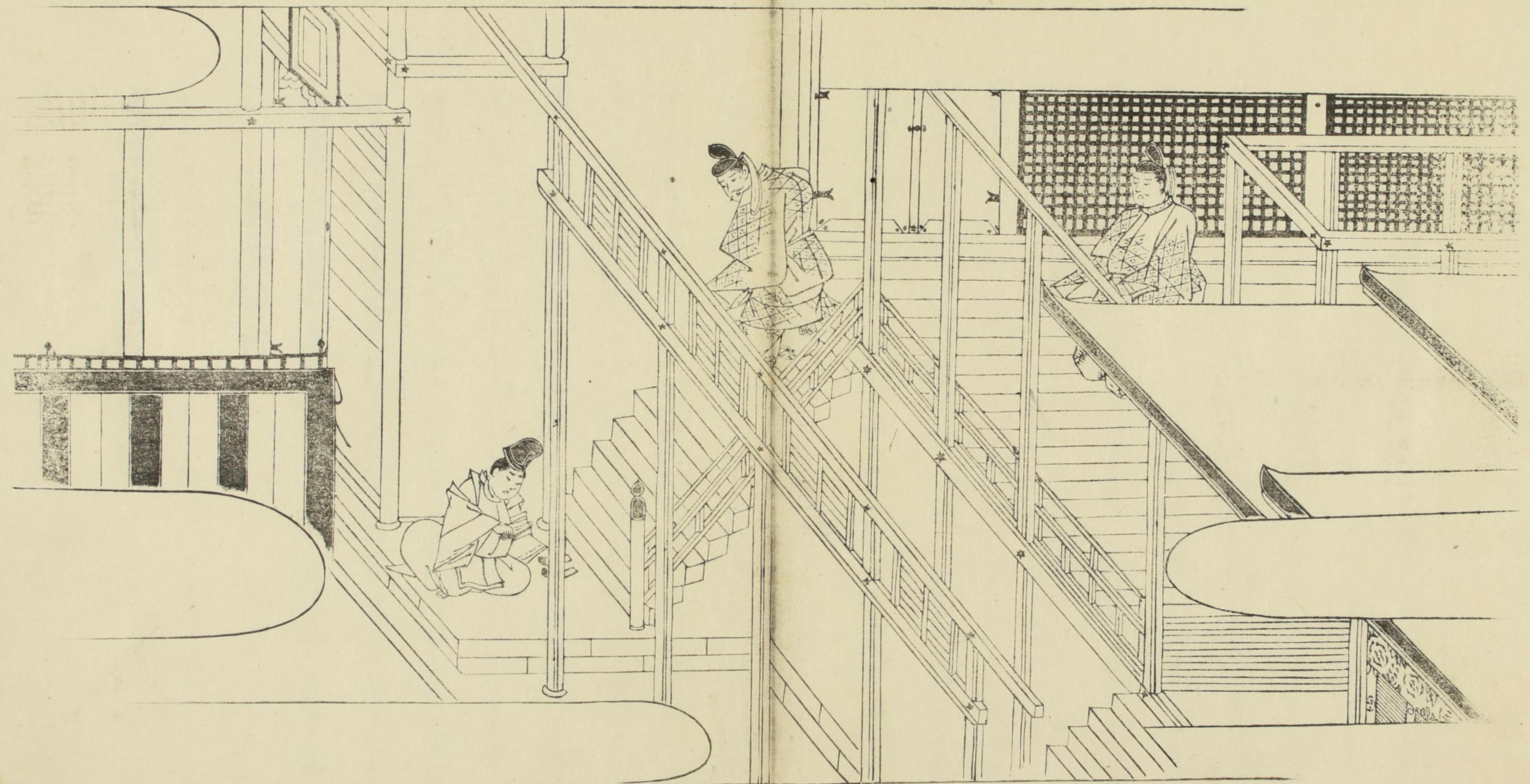


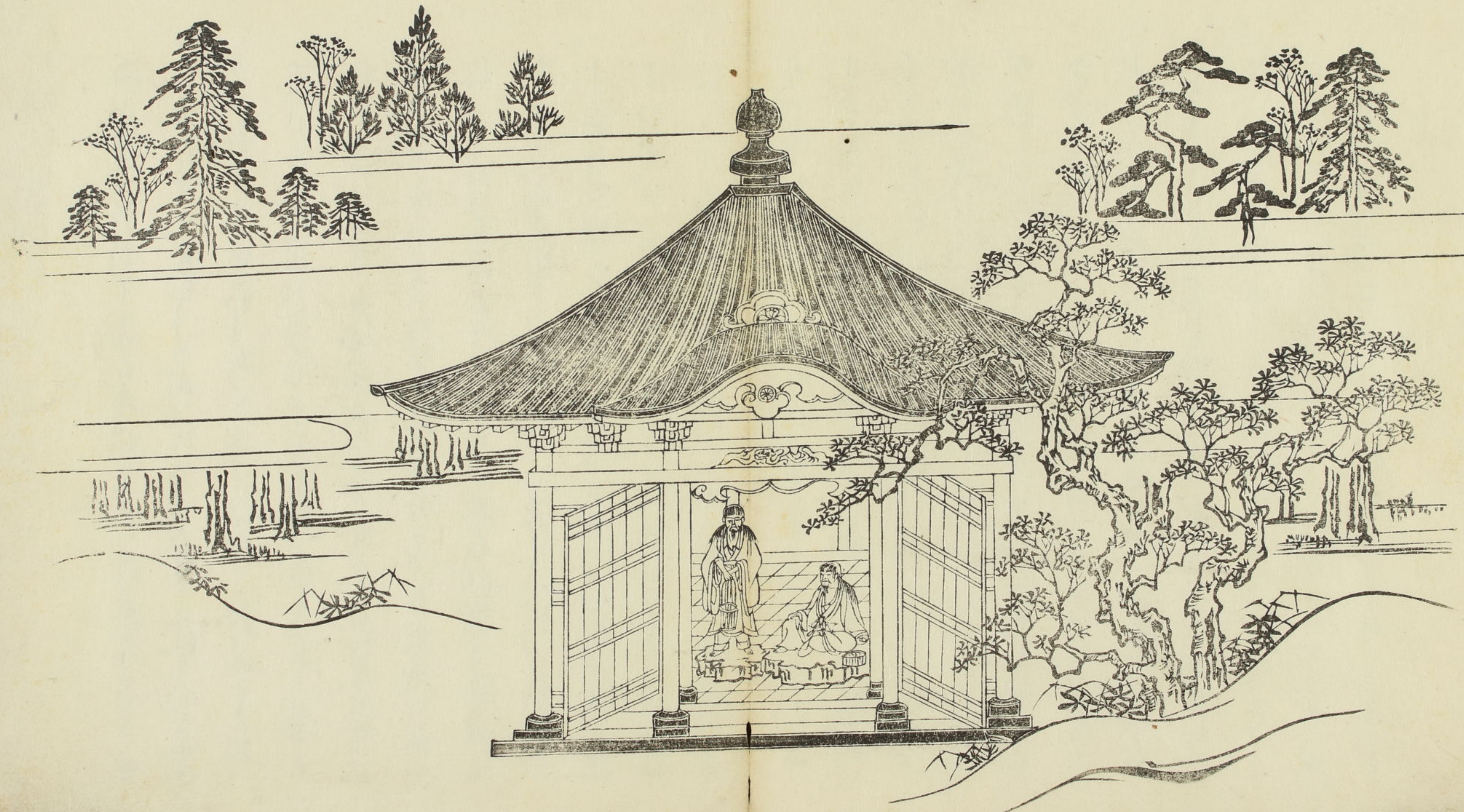
人との心の中をいよく衆をいひくさるるをいひて名を
文乃道と志深く一はのりも書をそとせよとあ
とれはをける官の中納言申すすれり先帝
かかるとを給ひ一は表をとりてそ職を辞せ
らるれと許し給ひ頼りに使をてしとて
もれをいひ給ひぬ父老よりけり再び職を
辞し孝養をてしとてを請ふれ一かこ又
許し給ひはまこと孝養れ志極めと深く
定省れしとていふと申すゆ父の意はたは
しとていひぬとていふとていひぬとて
言ふ鮮肉をてしとていひぬとていひぬとて
らるるに日吉野にありてはとていひぬとて
をいひぬとていひぬとていひぬとて
其事申すにぬとていひぬとていひぬとて
身をいひぬとていひぬとていひぬとて

藤原伊周公

藤原伊周公罪ありて太宰権帥より左遷され
給ひぬとていひぬとていひぬとていひぬとて
追て山崎寂光院より行進せられた伊周公起りて
ひ給ひぬとていひぬとていひぬとていひぬとて
唐國より居りていひぬとていひぬとていひぬとて







頼重朝正よすもめてしるれたるは是より
たのみ終るはくゆきし大事よややうに侍らぬ
まけくや入ぬくしりれたる頼重朝正よ
をぬかして許されぬ義公大に怪を致ひし世継
とたしよもくきらぬ封を継つるはくゆき
しりて長下サセ入の減書よきめてのしりひたる
はと幸れ年月を待てしりて試しよは失錯が
まゝくし大方前段の事なやまゝ改むは後言
とゆき事多し三年父の事を改むしりて
りて事ハきよれ慎むしりてまゝら
とそこのもいけ

大江舉周

大江舉周朝臣重病を更く頼重よすくめくええ
けれぬ母赤深弟門住吉明神の法よ請くしりて
家命をやりてされ命を助け給へしりて
新撰し七日のる籠りて一首のうきをそしりて
くきかきしりて悲しきしりてかきしりて
新撰ししりて悲しきしりて神感やまゝくしりて
を痛程あくしりてけりかきしりて後舉周朝臣は事
を聞し大よ終るしりて家命をやりしりて母よ
まゝくはきよれ道よすむりしりて



乃故よき宗にて我命助りて母をまじふ
ゆゑに宗たるいふと我命をりて母を助
け給へし泣く水もわれも涙も夢も悔とぞい
はん母よとれはうけりて

役小角

役小角は大和國

葛木上郡一井原村乃

しるべし人なりけりて

・ 伴のみつらをかきしり

呪術を能きり

三十二歳なりと云ふ

出づ葛木やまに

五穀を種をば食ふて

本買方しとを朝夕乃

をいとやりにしりて

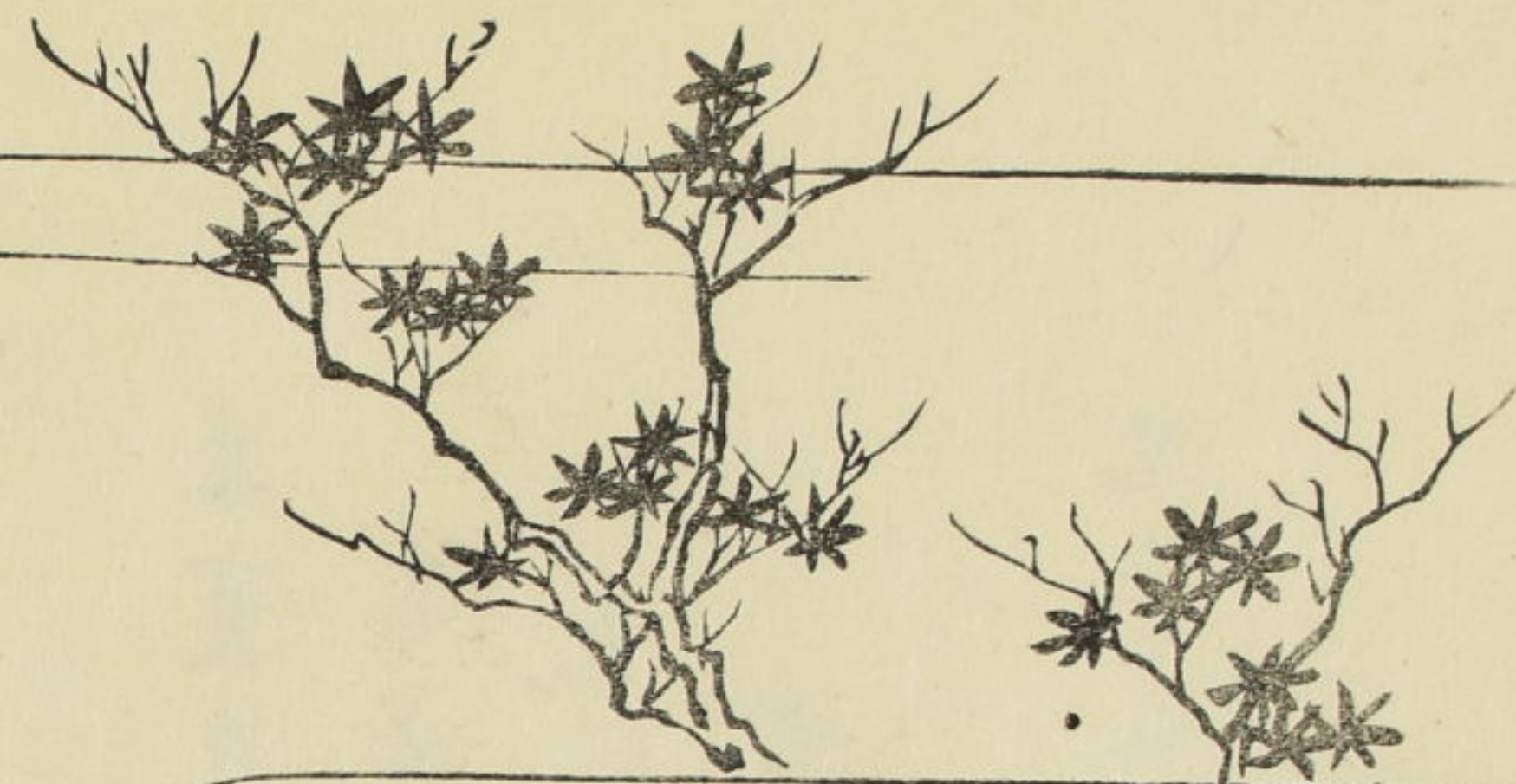
鬼神をうつりて水もみ

新をいしり

ゆゑに能きけりて

呪をりてとけりてけぬ韓國

廣足小角よほりて



其能を妬み妄りに妖術を以てしるす

感何ぞよ 後云 一々り

文武天皇の二年に詔して小角を

捕しめたりし大空に飛翔して

とて

母を捕しめたりし小角悲し

堪ふ 一々り 捕りぬるも

伊豆島の流されし一教を遂に免はれ

けしむのしるし母を鉄蹄しりて抱

て海小掣し

唐ふしれりし

倭果安奈良許知麻呂

倭果安奈良許知麻呂はとも大和國添下郡の人

なり父母の志あり 兄弟れり暗りして死

もれみれりしり糧を打運らるる病あり

まれの志ありしり符もしりしり春

ひりしりしりて登良等田二郷の百姓を治

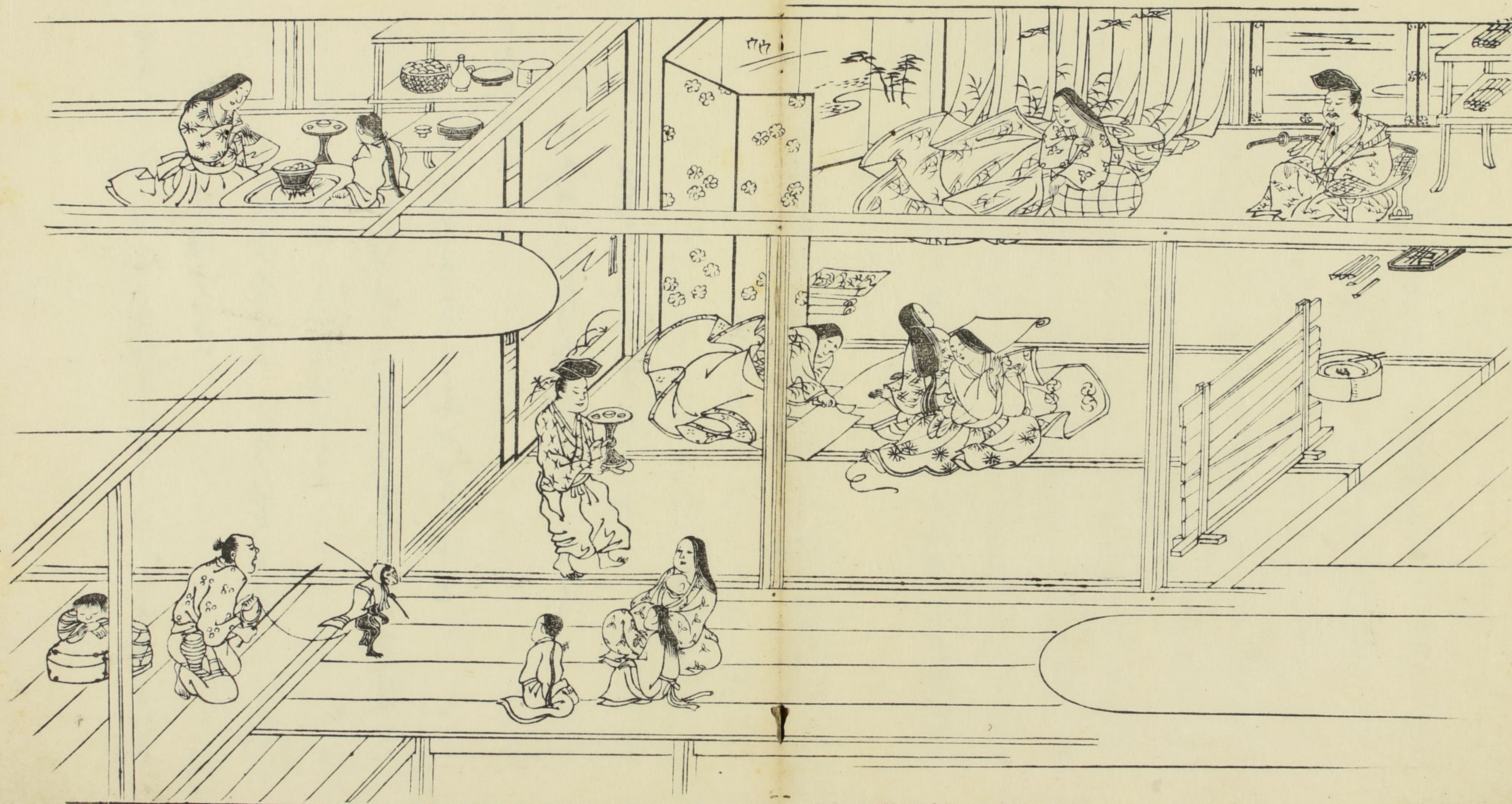
其志を感しりし母のしりしりしり

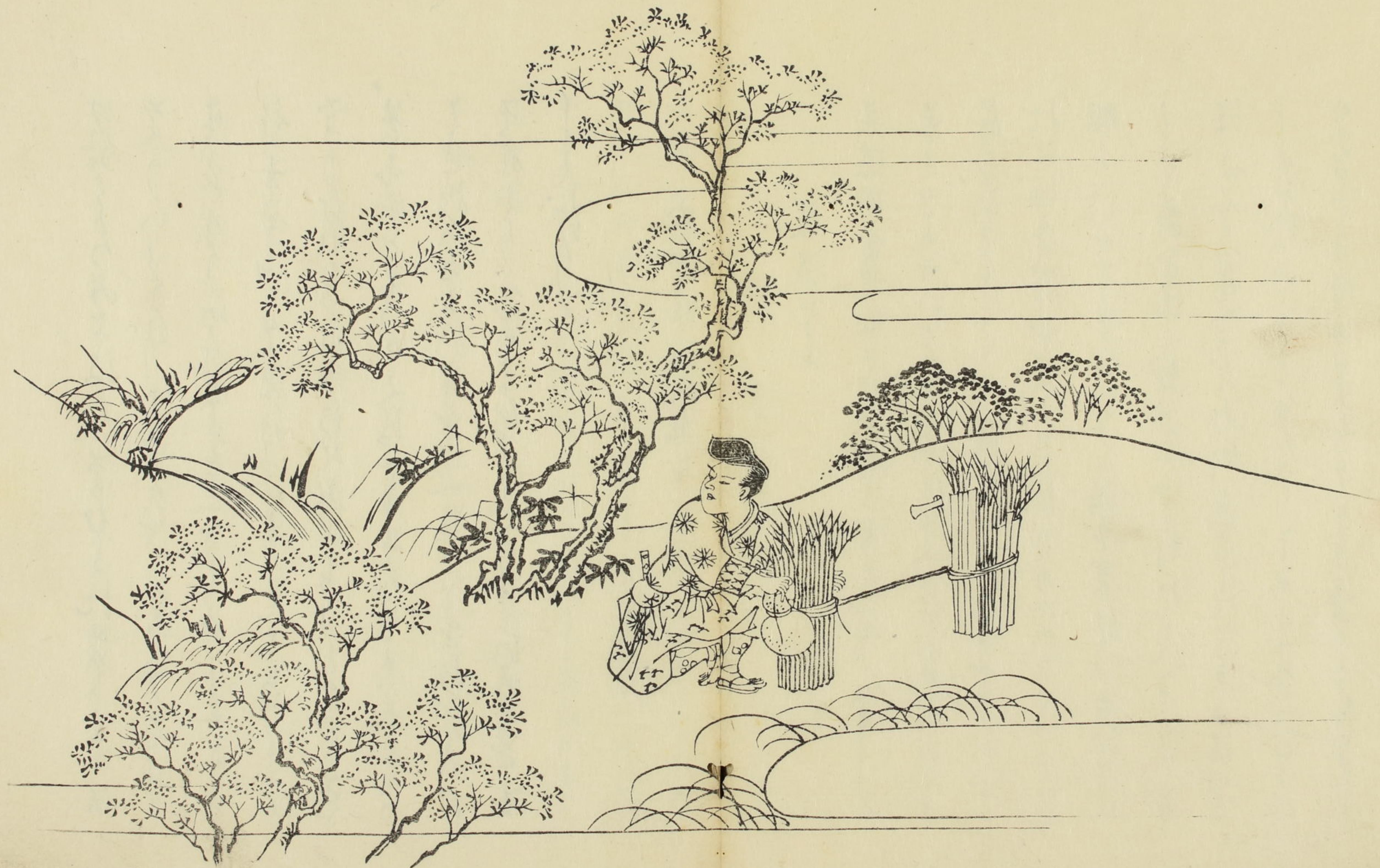
けり物なり許知麻呂の能母れ終言のありてみの

めり出いしりしりしりしりしりしり

なり青著極めて深ありけりしりしりしりしり

なり和相七年







身れ苦くも能くも官奴となりて

父乃罪をあるまはらん

しを象くりしれり

いほりたるは

中のきむとて

祖父麻呂を官奴と為

石勝り罪をゆる

文麻呂との流し

かそこのふ

祖父麻呂を

とよゆ

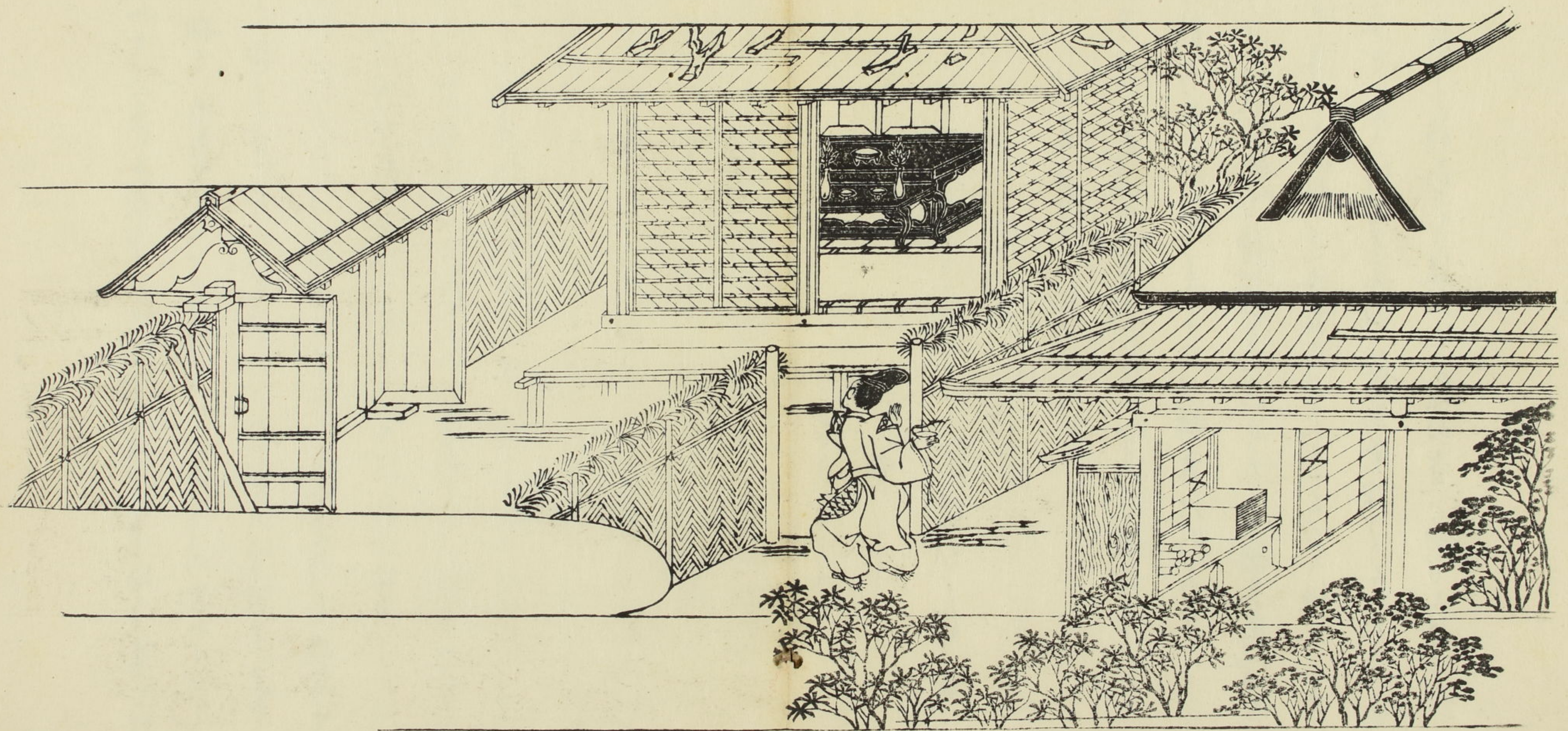
良民とて

なり

終ひけり

紀夏井

紀夏井ハ美濃守美岑の子なり温和にして
才能あり是承和のころ隷書に巧みなりを
りて授文堂に待治せられり文徳天皇は味
吉中御とれ水の志忠直みしてをりて練め
けりて神覚え殊ふは恩を深うりて天安二
帝崩し後出く後岐守と為りてけり



政やまゝの建民なるに従ひ任はるる御
ら相とてのち都のありしはのなる
しをいひしりれとせしは二年の御
をゆはれしは御の御の御の御
をいひしれとせしは都の御の御
又又の家小の御の御の御の御
かゝる御の御七年肥後守に任はるる御
泣悲みしりれは肥後國の御の御
御の御の御の御の御の御の御
夏井は御の御の御の御の御の御
ける夏井の人とての御の御の御
泣悲むしりれは御の御の御の御
を藏りてありしは御の御の御
の妻をいひしりれは御の御の御

丸部 明麻呂

丸部 明麻呂

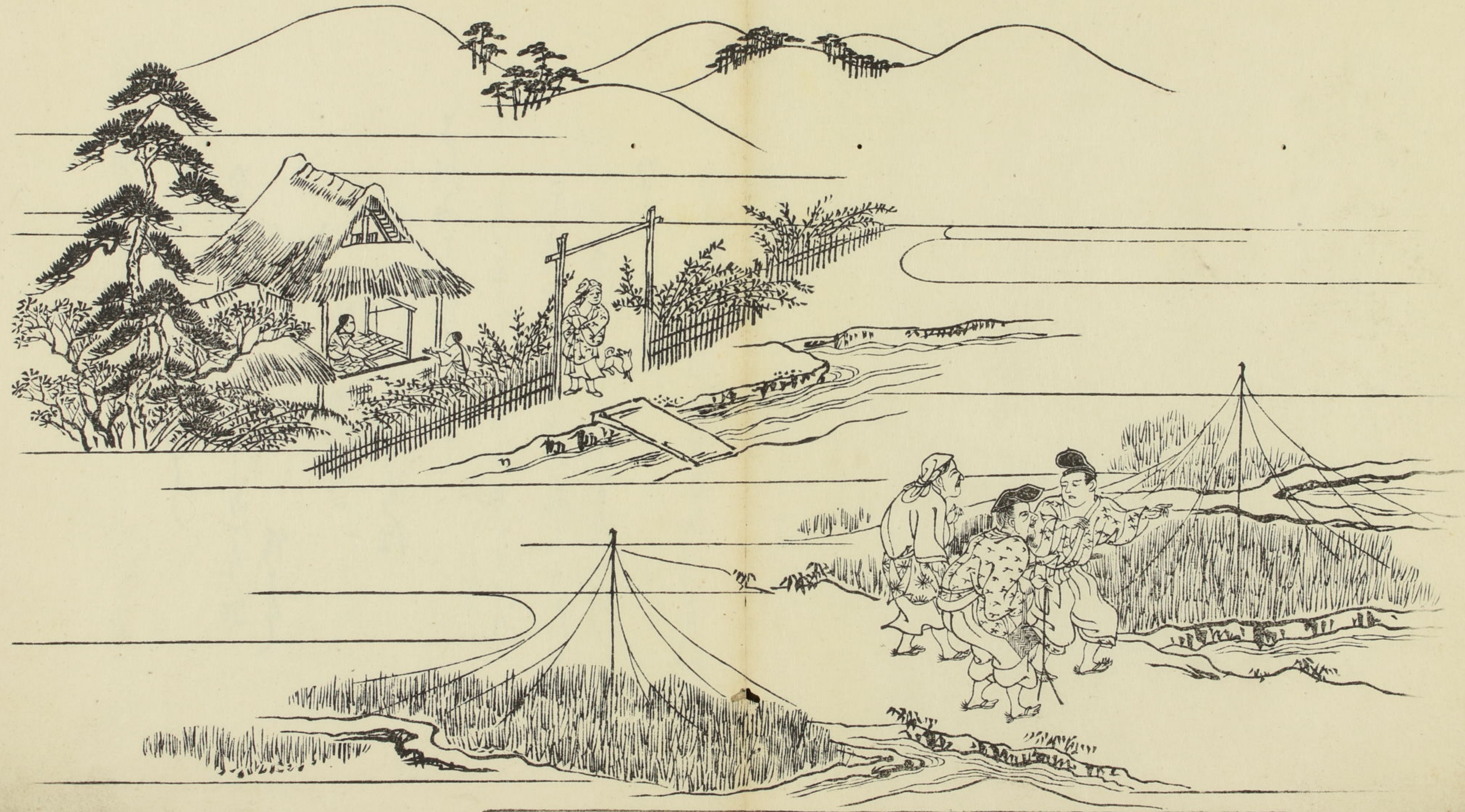
御の御の御の御の御の御

しりれは御の御の御の御の御

と十八の御の御

しりれは御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御



ゆきまゝにふりかへし

本部の大臣

なまじりておぼしめし

御殿

まじりて

まじりて

まじりておぼしめし

まじりておぼしめし

まじりておぼしめし

まじりておぼしめし

まじりておぼしめし

父母老衰に及びしに

定省の勤りに

急らばはつらかり

國日具りし其首をいへ

あけられ

嘉祥元年に

詔して位之階を進め

られ

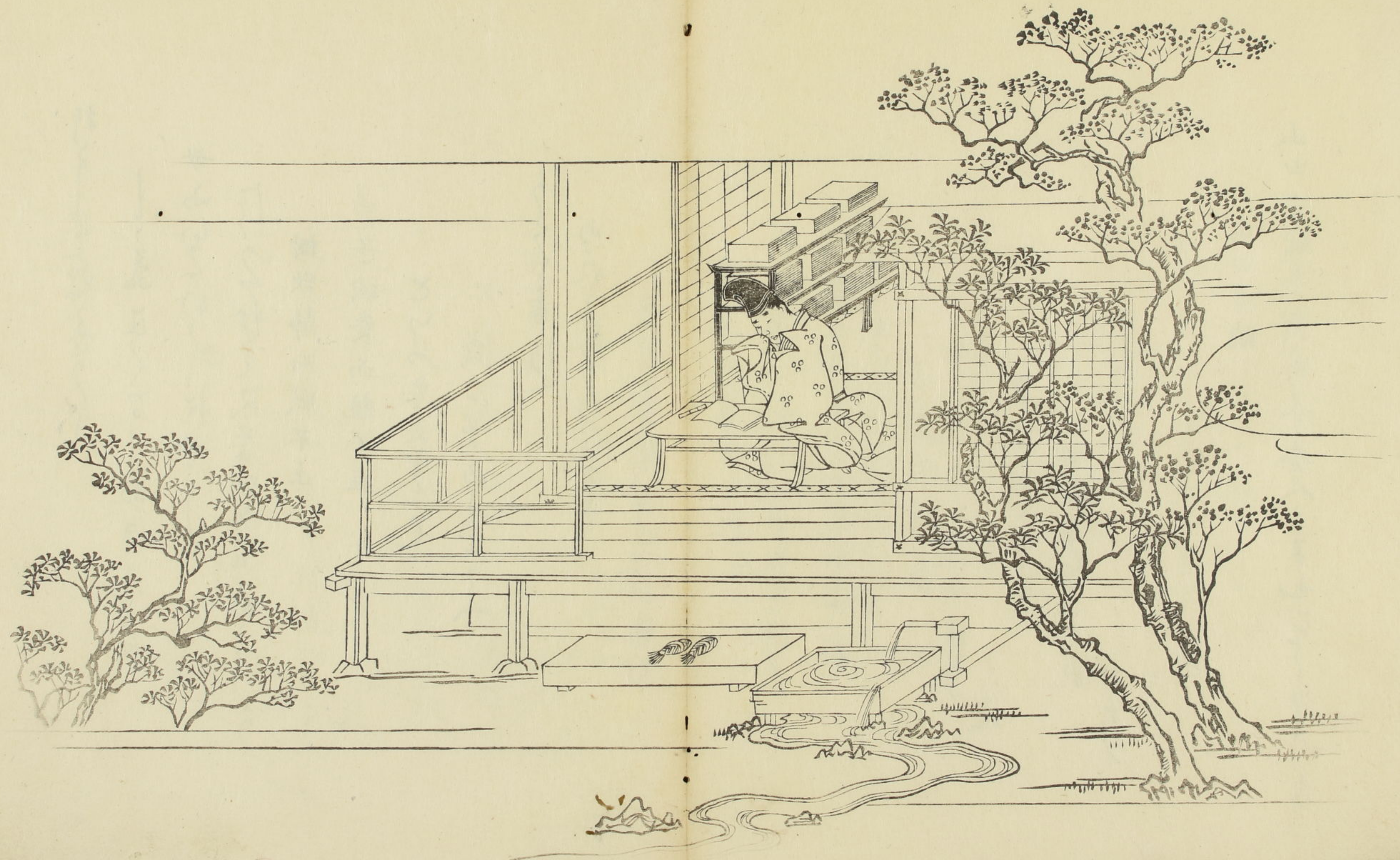
おぼしめし

田租をゆるされ

けり

山田古嗣

山田古嗣を越前介益入り子也ひそかき孝



行のて候ふ

幼少のころ

母の心

はげしく又学問を好み

樹欲静而風不止

子欲養而親不在

と云ふ本文

をよみ

書け

ぬれぬ後父を

なむと悲む

と云ふ

はなれぬ

公卿愛識

必問正し

又文人を

帝は

永和十年阿波介

任は

毎

舟生弘吉



丹生弘吉は若狭國

遠東都乃ひくゆり幼く

しこ父よおれ母よおれおれ

とらうら耕しつらうら

母をやしなひよ〜おれおれ

夏は〜

ふゆは温〜聊も母のまに

集くる事な〜おれおれ

父の墓に詣〜おれおれ

〜おれおれ

弘吉の作き〜田畑の水旱

風壇〜

備えれ〜

けり

里人のま子の〜

神も憐み〜

〜

〜

〜

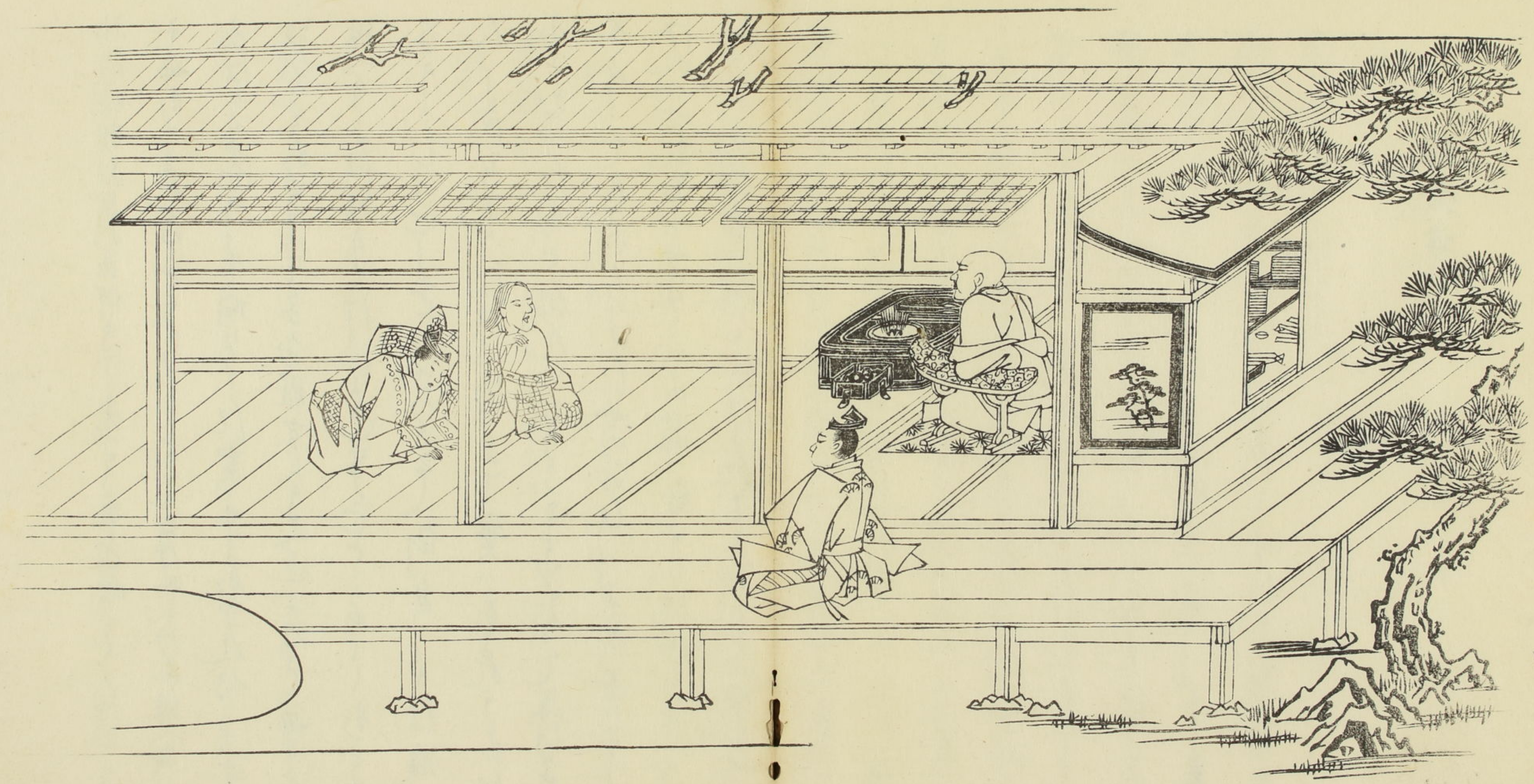
貞觀二年信二階

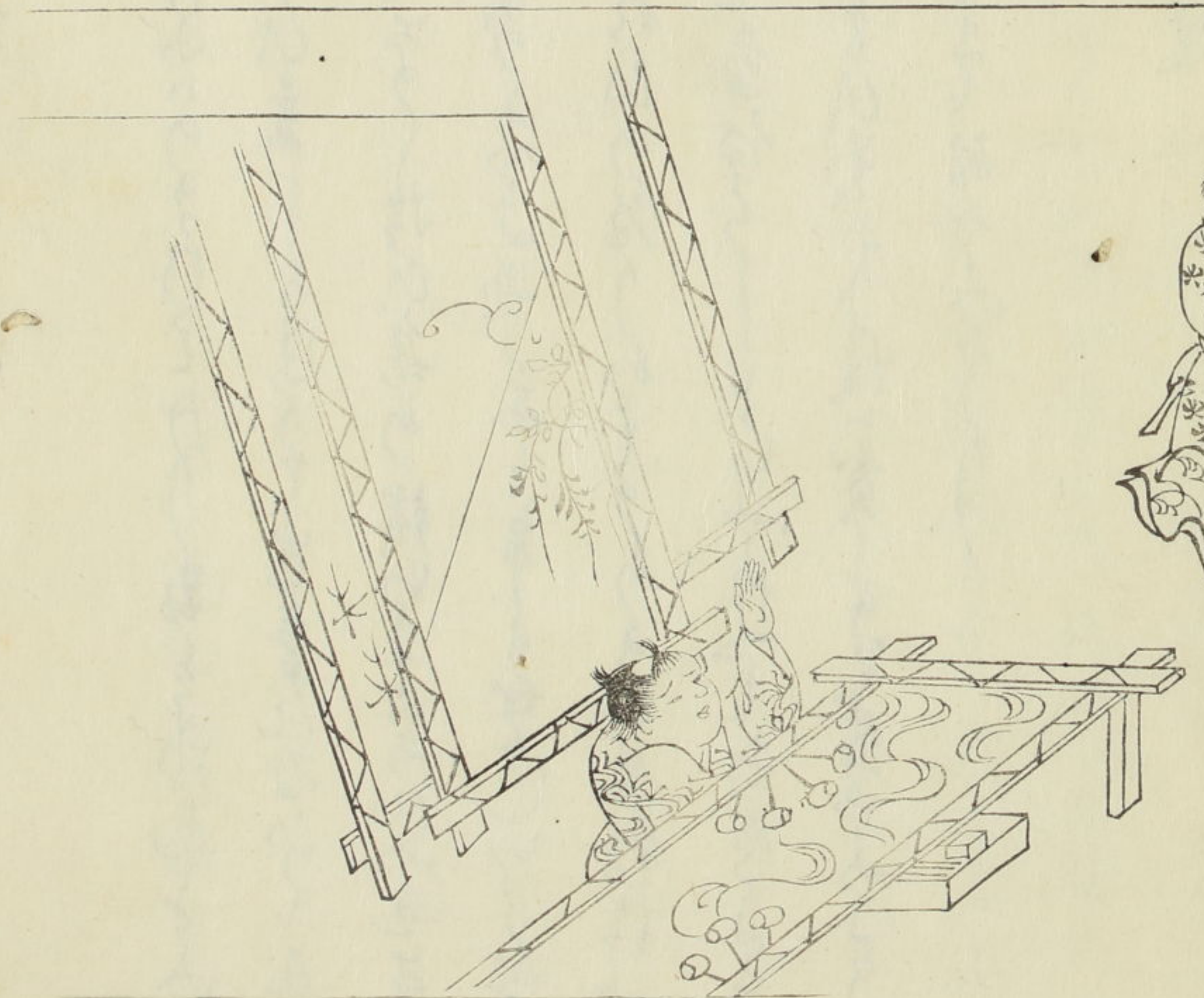
〜

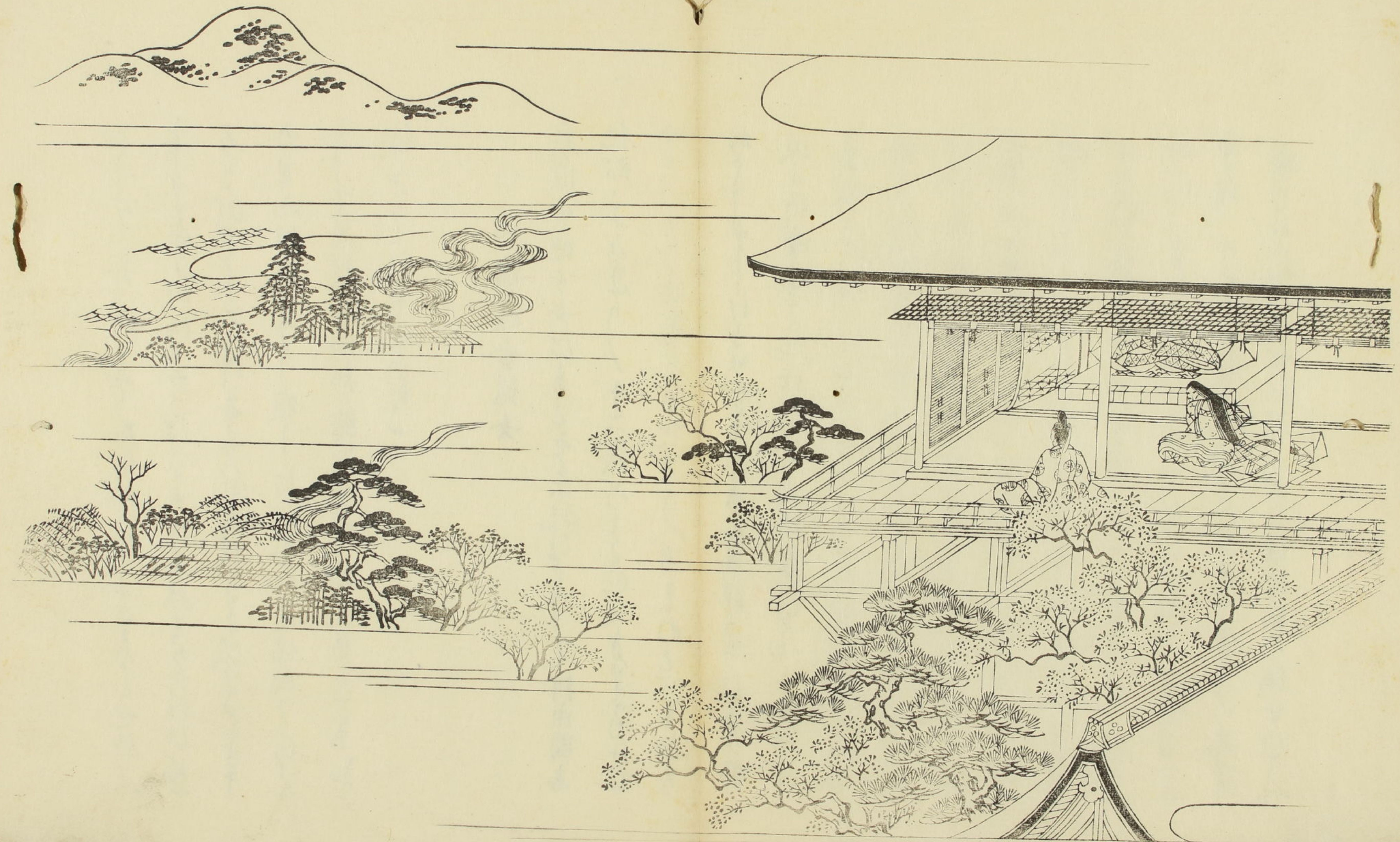
隨身公助

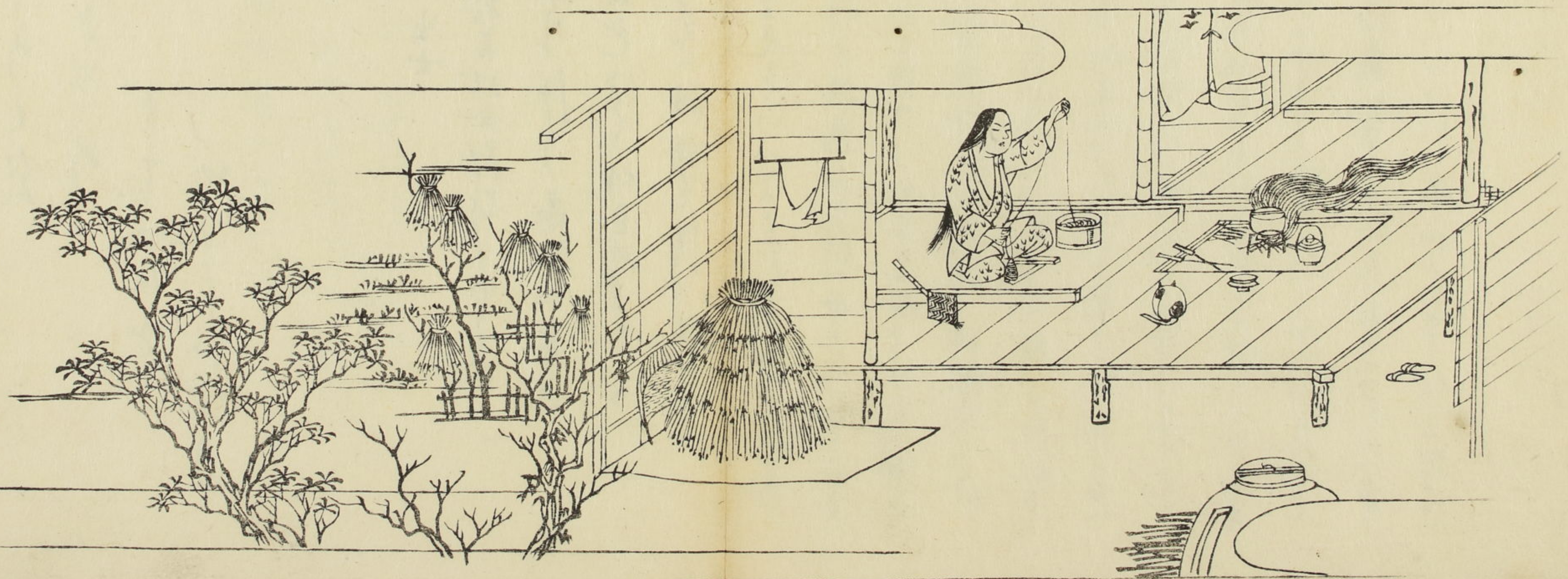
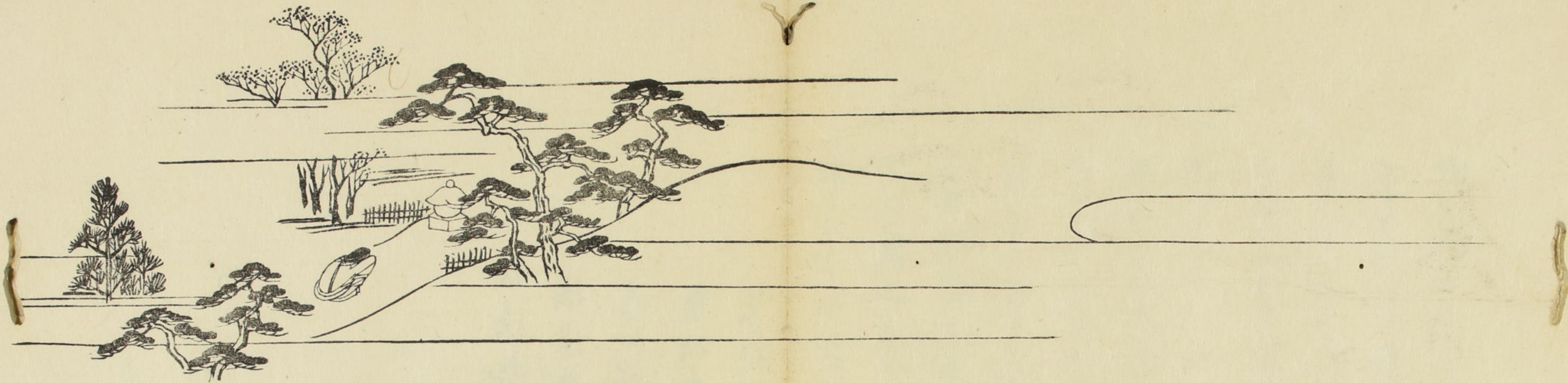












はなはな

身を終る

まて田祖を

ゆきゆき

橘逸勢朝生女

橘逸勢朝生女はひきりなり

孝心深かりけり承和九年逸

勢朝生女をひきり伊豆嶋よたつ

これけりを泣きとけりあ

を追うたひゆきけり

警固乃人々答めて追ふ

せむしのひきり夜

を追うたひゆき

遠江國坂築津あ

逸勢朝生女をひきり

そをひきり暮れ傍よ

庵をひきり住けり

まて田祖を

ゆきゆき

妙沖



けり 初夕

念 伸 借 甚 急 乎

かほりたるを涙色

流しけり 又後

ゆり 羨るしをゆるされ

しはみりたり

極を履く 京にかり

ぬんしうに舞り

くさむりいと香りの

くさむりいと香りの

ほろりあひけり

微妙

微妙はもと報さし 賤しからぬいれ子也

高きゆり 鎌倉に沈みり 比源頼家朝臣

比企能負のあし 新く 壺酌をゆるされ 酬

奉る 微妙をきり けり たるはし けり

らぬるれり 舞たり けり みるるる

感嘆をけるは かな かな 能負頼家朝臣

中けるは 舞女はもと 京師のいと けり

し かな かな 能負頼家朝臣 舞事の時

をいそ げり けり みるるる けり

